

未来のための生業、伝統的知識・技能の再創作 ～ 環境学習プログラムの効果測定 の解析（予察）

木俣美樹男

自然文化誌研究会／植物と人々の博物館／日本村塾

1. はじめに

世界的に著しくグローバル化や商業主義化が広がり、多くの資源が消費され、世界中に画一的な商品が流布している。現代文明の大量生産、消費、廃棄は科学的知識の乱用による技術によって支えられている。言い換えれば、国際巨大企業が生産技術を要求し、現代科学はこれに従い、科学者個人の自由な発想による知的な仕事であった基礎科学はその哲学思想も衰微させて、片隅に追いやられている。

この国の大都市は全国から、世界中から、物資も人々も集めている。農山漁村、中山間地は過疎高齢化に苦しみ続け、いよいよ多くの村落が消滅する寸前にまで貧窮している。都市に暮らしている人々は、山村の人々も都市に来ればよい。その方が辺鄙なところに暮らすより効率よく暮らせると思っているのであろう。都市民は、山村民が自然と闘い続け、その長い歴史的な結果として、自然と共存し、共生関係を築いてきたことを現場で学ぶことなく、知ろうともしない。したがって、他人事のように、無関心でいる。山村の過疎高齢化は、継承すべき生活文化を伝える人々が減り続け、継承困難な危機的状況に立ち至っている。これは山村の問題であるばかりではなく、実は都市問題であることに、都市民はほとんど気づいてはいない。

このくには自然に恵まれすぎているので、災害は忘れたころにやってくる。台風・洪水、地震・津波、あるいは渇水だけではない。昨今の局地的な豪雨や豪雪を事例に考えてみよう。たとえば、山梨県小菅村は30年来の大雪で閉じ込められたとニュースで報道された。村人は伝統的知識に従って食料を備蓄しているから、本当は何も困らない。実は、道路網が分断されて、孤立して困るのは巨大都市東京なのである。各地からの物資が集まらなければ、コンビニエンス・ストアもスーパー・マーケットもその商品棚は空になり、大人口を満たす食料も燃料もすぐに底をつく。緊急時でも自ら家族を養えるように食料を備蓄し、常日頃から伝統的知識を学び、自給農耕し、危機に備える必要がある。古老からの言い伝えをないがしろにして、忘れては、100年に一度の自然災害や飢饉に対応できない。

日本の学校教育は、地域の自然や歴史、生活文化に関わりなく、全国一律に科学的知識の伝達を行い、地域固有の伝統的知識を体系的に再創作していない。このくには、3000 kmにわたり亜熱帯から冷温帯にまで広がり、数多くの島嶼、山岳がありながら、四方を海に囲まれてもいる。これほど複雑な自然環境は地域固有の事物や事象を地域ごとにもっているにもかかわらず、大都市を基準にした画一的な教材では実物や史実に依拠した学びはできない。

パーマカルチャーの提唱者の一人であるホルムグレン (Holmgren 2002) は類似の見解を次のように述べており、共感する点が多いので、引用しておく。

「…地球環境の危機は人間の文明すべて、とりわけ都市を脅かしている。都市が環境危機へ対応しないかぎり、事態は改善されないだろう。そして、その解決のためのヒントや事例、知恵は、都市ではなく農村に見つかるだろう。農村という辺境では、人間が文化と自然の接点、現代と過去の接点で暮らしているからだ。…辺境からの革新的な再生というと、大学に到達する。ピタゴラスが世界初の大学を設立してから二五〇〇年以上がたった現在、大学という機関は知的教養に対する影響力をまったく失った。大学がそうした影響力を劇的に失う一方で、物理的・知的辺境にいる人た

ちの進歩的な考えや行動への貢献を可能とした背景には、いくつかの要因がある。①大学教育が一般化し、学部教育が低下し、教育の質が落ち、教員の報酬も低下した。②科学還元主義という知的袋小路を克服できず、物事を包括的に捉える文化が育たず、学際的な研究が報われない。③知識商売が企業の論理に乗っ取られ、学者の財政的・政治的自立がなくなった。④新しいコミュニケーション技術やメディアの発達によって、辺境にいる者も中央にいる者と同じように、情報やアイデアにアクセスできるようになった。…自ら体験した大学教育と比較して、コースの知的水準の高さや知的刺激の大きさについてのコメントを寄せてくることが多い。…文化や知の再生の場が辺境にこれほど求められたことは、歴史上いまだかつてない。…W. ベリーは「…、現代の企業的農業とそれに付随した農村の生活やコミュニティの崩壊に対する批判のなかで、現代の農業は無知で尊大な通説によってコントロールされており、…」と述べている。」

「…企業や役所などの組織を動かす人の知識や技能は、長期的展望にもとづく公教育制度が育んだ。しかし、知性と先見性は脇に追いやられ、目先の損得に一喜一憂するその場かぎりの狡猾さにとって代わられた。科学の知識は社会が分かち合う共有財産だったが、知的所有権の主張の前に、売り買いされ、略奪され、管理されるようになった。…現代人は、先住民の文化や土地に自然に根付いた長期的なものの考え方を再生させつつ、それを凌駕していかなければならない。地球の生命史の多面的な性質を観察し、さまざまなパターンを読み取り、感じる方法を学ぶことで、直面する変化を利用し、創造的に対応する能力が身につく。」

2. 伝統的知識・技能の価値

伝統というものはまるで生き物である。伝統という文化的進化の創造物は、遺伝子に刻まれる生物的進化として伝わるものではない。伝統的知識であれ、伝統的技術であれ、子どもが引き継ぐには、大人をただ真似ればよいのではない。真似をするだけでも容易なことではなく、これらを十分に習得するには自らその都度時間をかけて、繰り返し再創作しなければならない。ここでいう伝統的知識 Traditional knowledge とは、地域に住む人々の実用的な経験に基づいて蓄積されてきた知識で、地域固有性と状況統合性が高いものである。地域の暮らしに関わる生態、分類、農耕、認知、物質文化、芸術など、とても広い範囲に及んでいる。

伝統的知識は、科学的知識に対置されるものである。意外なことに、むしろ欧米の研究者たちが、慢心した科学万能主義の反省から、自然と共存してきた先住民や小規模農耕民の伝統的知識を評価し、これらから学ぶ必要性を強く主張しているのである。科学的知識と対等に対置して、伝統的知識の新たな解釈および再評価を求めているのである（コットン 1996、ジョンソン 1992）。

民族科学と一般に呼ばれている新たな学問分野である。たとえば、植物学に基礎を置く場合は、植物と人々に関わる全てを研究対象とする民族植物学と呼ぶ。生活道具、食料、医薬品、自然環境保全、生物多様性、遺物、信仰、芸術など、植物に関わるあらゆる事物や事象を研究対象とする。主に、キュー植物園、ユネスコや WWF が中心になって各国の植物園、大学などと共同して、民族植物学の調査研究を進めてきた。

3. 未来のための生業のすすめ

日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが消滅する寸前に立ち至っている。一方で、何百年、時には千年以上にわたって暮らしを維持してきた集落に蓄積されてきた伝統的知識体系や技能には、現代的な課題となった「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに保全されていることが明らかになってきている。

自然だけではなく、身近な土地からさえも切り離されて世代を重ねた都市部の住民にとっては、この知恵や技能を総合的に体験し、自らの暮らしの組み立てを考え直す機会は極めて有効である。自然を単に体験するだけでなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流は、これからの農山村民と都市住民の交流の新たな姿として探求される必要がある。この実践研究プロジェクトでは、3年次計画で実際の伝統知学習プログラム展開をしつつ、この新たな交流実践の姿を描き出す試みをしてきた。農山村と都市からの参加者ともに、生活における伝統知や技能の大切さとその継承による健全なライフスタイル、すなわち素のままの美しい暮らし（sobibo）へと変容するために学ぶための良い実践を蓄積してきた。これらの文化的財産をもとに、これからの私たちの生活や人生の先行きを明るく直観できるような統合概念をともに発見し合いたい。

都市住民の多くは高慢な偏見で山村を想い、また、山村住民の多くは屈折した感情で都市を思っているようだ。しかし、今日では、比率はまだ少ないながらも相当数の人々が、自然と向き合ってきた山村の豊かさ、自然を忘れて久しい都市の貧しさを、少し穿って直観するようになってきたと思う。これからも、多くの人間は科学技術・機械社会文明を極めようとするだろうが、他方で、直観した人々は着実に自然とのかかわりをもう一度考え直し、素直な幸せを求めて「生き物の文明」を再創造しようとするだろう。

山梨県小菅村では、源流の郷やエコミュージアム日本村（トランジション小菅）など、村づくりの取組みを継続的に行い、経験を蓄積してきた。さらに、山村の人々は他地域の優れた経験を学び、山村の暮らしをより楽しいものにするとともに、また、都市の人々にも山村の生業を都市の職業に加えることによって、人生をさらに幸せにしたらよいと願う。このプロジェクトに関わるいくつかの環境学習プログラムで、山村の豊かな暮らしを再認識できるようになったと思う。

経世済民の失政により、経済や災害によって深刻な危難に瀕しているこのくにをどのように再生するのかを、私たち一人ひとりが、自ら深く考え、課題を見つけ、解決する示唆を得ねばならない。自らが強い意志をもって、一人でも自分の課題としてとらえ、ゆっくり地道に、人生を、家族を、身近な人々を、地域社会を楽しく幸せにするように努力することだと思ふ。

1) 幸せは自由である ―このくにの人々が不幸からぬける手法

私たちは人生に幸せを求めて良いのだと思う。このくにの人々の不幸を幸せに転ずる方法は、自然に従い、農耕など生業をもち、職業（産業）のほかに趣味を大切に、素のままに美しく暮らすことである。

- ①自由気ままに： あるがままの思いを素直に認め、自由から逃げない。他者を不当に傷つけず、自らも傷つけない。一度しかない、短い人生を十分に楽しむ。
- ②とらわれないで： 思い込み（主義）にとらわれ過ぎない。三毒：貪欲 憎悪 無知。名利に走らず、怨恨に振り回されないように、教養を深め高めるように学ぶ。
- ③ほどほどに： 実行しようと決めたことはゆっくり続け、努力を怠らずに、意思・約束は曲げない。過剰な奪い合い、不公正な競争はしない。
- ④自給知足： 人生は職業（産業）のほかに、生業を楽しみ、自ら充たされ、この世に恨みを残さない。自分たちの食べ物などはできるだけ自給する。不足分は地域から分けてもらう。
- ⑤トランスパーソナル個人主義： 個人主義の拡張・展開、超越による思いやり、分かち合い。多くを学ぶことが教養の質だ。学び考えることから逃げない。家族・友人を大切にし、人脈を広く求める。
- ⑥社会参加： 地域社会の市民サークル（CSO）に参加して、くにや世界のことを学び、考えて、地域を良くする活動をし、社会に意見を述べる。

2) 現在の到達点

伝統的知識・技能は自然と向き合うにはなくてはならないもので、何もかも捨てて良いはずはない。家族小規模農耕、市民農園などでは適正規模の技術が必要だ。産業ではない生業は生きるために必要であり続ける。高齢化社会の重要課題は大切な伝統を、身をもって体験的に継承することだ。

図1に示すように、現在の到達点がすべてではなく、現在はこれまでの歴史のすべてを含み込んでいる。現代であっても、私たちは山野では野生時代・前農耕時代そのままに、狩猟・採集や漁撈をしている。家族小規模自給農耕はこのくにの特色であり、兼業農家として継承され、また市民農園などとして新たな農耕・園芸形態も広まってきている。もちろん大規模稲作は、農業技術の発達や農地改良などにより、このくにの人口に見合う程度に過剰生産できるようになっている。

現在では、生命科学技術の発展により、命さえも多分に操作され、売買され、また莫大な量の食料も安い燃料によって交通網が維持されて世界中を駆け巡っている。食料の価格は自然災害によってよりも、先物買いや国際金融の動向によって左右されている。それでも、現代がすべてITによって動かされているわけではない。現代といえども、歴史は消せず、これまでの歴史を含むように多層な複雑構造によって文明は存立しているのだ。

現在日本の農耕文化の歴史的多層構造

連続的に、混合的な生物文化多様性への蓄積と衰退

複雑／単純 The nothing / The convenience

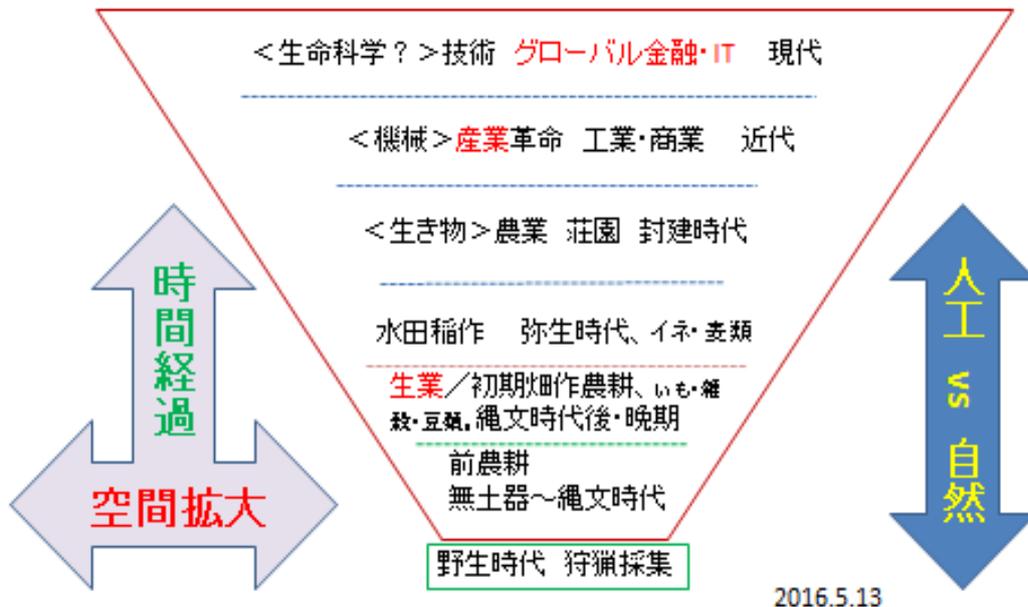


図1. 農耕文化史のすべての時代を含有する時空間

3) 生業とはなにか

人間が自然と向き合わなければ、村にも街にも野生が戻る。素のままの美しい暮らしの基層は自

らの「生業」である。山村の暮らしでも生業だけでは暮らしにくく、都市での暮らしは生業を得られず、生業がなくてもとりあえず暮らせる。ここに、拝金経済至上主義の陥穽がある。山村民は生業の不足を産業に少し関わることで補い、都市民は産業の隙間に、生業を組み込むのがよい。{注：語彙：Subsist；生存する、食っていく、暮らしていく、食料を与える。Subsistence；生存、生活、生計。Subsistence farming；自給農耕。Subsistence crop；自家用農作物。}

人間は実に遊び暮らすことに人生をかけてきた。狩猟（鉄砲ぶち、魚釣り、蜂取り、蜜蜂飼養…）、採集（盆栽・銘木、山菜、きのこ、野草、昆虫…）、収集（石、化石、貝殻…）などの minor subsistence は、どれほど先人たちの人生を楽しくしてきたことであろうか。人生を楽しく遊び暮らすには、過剰な便利や不要不急なものを無くす。過剰な消費のために、稼ぐことを止める。簡素な生活をし、自給知足するのが良い。さらに芸事、文筆、野外活動などをするのも良い。家族の暮らしの中で、生業と産業のバランスをとれば、ゆったりした暮らしができる。地域社会・くにで、第一次産業を都市民による生業で補完すれば、野生の復活を許す放棄耕作地を楽しみながら減らすこともできる。都市に人間が集住すれば、野生は山野を奪い返しに来る。福島原子力発電所の公害で、居住できなくなった街には、放射性物質の危険性を知らないイノシシなどの野生動物が跋扈している。都市にもイノシシ、サル、クマなどの野生獣のほか、ペットなどとして飼われていたハクビシンなどの外来獣が逸出して徘徊している。過疎高齢化はこのくにの山野を野生に戻す方向に機能している。自然と人間の闘いの拮抗の上に、共存や共生が進化してきたが、現在は、大都市集中によって自然と人間との折り合いにほころびが出てきたのだろう。

4. 環境学習プログラムの効果測定 of 解析

自然文化誌研究会と ECOPLUS が、「農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流」（2014.7～2016.6）の課題に即して実施した環境学習プログラムへの参加者アンケートの結果2年分の共通調査票を統合して、参加者の大まかな特性を把握するように試みた。記述統計（n=260、SPSS Statistics ver.21.）およびテキスト解析（n=331、SPSS Text Analytics for Surveys ver.4.0.1）を使用した。なお、テキスト解析にあたっては、英語で記載された12名分の回答を和訳して用いた。

1) 記述統計

表1により環境学習プログラムに対する5つの質問項目、「B1 総合評価、B2 自然と暮らしへの理解の深まり、B3 伝統的な知恵や技術の大切さ、B4 気づきや知識を暮らしに活かせるか、および B5 農山村への関心・興味が高まったか」、に関して予察的評価を加えてみたい。プログラムに関する5段階評価点はすべて4以上で十分以上の評価であった。あえてあげれば、B4について平均値(4.05)が若干低く、変動係数(20.68)が若干高かった。参加者の属性を職業(子供、大学生、一般社会人)、性別(男女)、参加回数(1回、2～3回、4回以上)、および年齢(8歳から69歳まで、平均28.5±14.5、大学生が多かった)に区分して、5つの質問に関して相関係数を見た。どの属性にも評価について高い相関は認められなかった。B1について参加回数、B5について職業と5%レベルで有意差は認められたが、相関係数はごく低かった。属性・職業(子供、大学生、一般社会人)において、t検定を行ったところ、学生と一般社会人に関しては有意差は認められず、子どもと学生の比較では、B1についてのみ5%レベルで有意に子どもの評価が高く、子どもと一般社会人との比較では、B5においてのみ5%レベルで有意に一般社会人の評価が高かった。子供はすなおにプログラムを楽しんだが、暮らしに活かすことはあまり眼中にないようだ。

小柳(別に報告)による Kruskal-Wallis 検定によれば(n=209)、やはり全体評価は良好であった。エコプラスと自然文化誌研究会の実施プログラム間では、前者の方が、若干評価が高く変動が少な

い傾向があった。とりわけ東京学芸大学の学生と雑穀栽培講習会関連の参加者の評価は変動が大きいように見えた。プログラム内容がより高い評価に関与しているようだ。主催者は参加者の求めに応じてプログラムを改良し、より以上の評価を求めるのか、主催者が参加者に提案することを優先するのか。これらのプログラムへの評価は比較的高かったので、おおよそは良かったと判断したい。伝統知・技能は世間が見捨ててきたもので、それを見直してほしいと考えて企画したプログラムであるから、この意味でも妥当な評価と考えて良いと思う。

表 1. 環境学習プログラムに関する 5 段階評価（記述統計）

	平均値	標準偏差	変動係数	n
B1	4.588	0.6244	13.609	260
B2	4.258	0.7704	18.093	260
B3	4.481	0.7376	16.46	260
B4	4.05	0.8377	20.683	258
B5	4.388	0.8163	18.603	258

2) テキスト分析

各質問（B1-a～B5-e は上記評価の理由）および（C1-f；全体の印象、C2-g；新たな学びや発見、C3-h；環境と調和した社会づくりのヒント、C4-i；なんでも感想・意見）に関して求めた短いコメントをテキスト分析した。記述された文章から語彙を抽出し、さらに感性分析によりカテゴリ化された代表的な語彙から、参加者の具体的評価内容を大まかに考察する。

表 2 に、各質問の回答で多く抽出された語彙（10 回以上）を示した。まず、全質問において共通して多出した語彙を見て、「思う」はどう思うかとの問いに対応しているので棄却する。「自然」はすべての質問で多く回答されているので、環境学習プログラムの主要なキーワードであることは明白であった。「自分」は、B1-a と B3-c 以外では 10 回以上出てくるので、参加者が主体として答えようとする意思が見て取れる。「生活」は、B1-a、C1-f、および C4-i 以外で多く回答されているので、ここで提供された環境学習プログラムを生活と結びつけようとしている参加者が多いといえる。

次に図 2 に示した抽出カテゴリのネットワークレイアウトと対比しながら、個別の質問において、特徴的に多出する語彙を順次検討する。

質問 B1-a 総合評価では、語彙「体験 39・経験 10 回」、「自然 20」、「学ぶ 12」および「交流 11」に加えて、「できる 42」、「とても 23」、「良い・楽しかった 16」、「たくさん 13」が頻出し、積極的な評価として解釈できる。図 2a には、「良い」という感性表現について、プログラム内容に満足、時間配分、美しい自然・雪、子どもが楽しんだ、田植えや地元との交流など、積極的なカテゴリが主に「自然」というキーワードをめぐって出ていることから、とても良い評価を得ていることが明瞭である。

質問 B2-b 自然と暮らしへの理解の深まりでは、語彙「自然 58」、「話 19」、「生活 18・暮らし 12」、「自分 15」、「理解 10」が頻出し、積極性をうかがわせる語彙「できる 35」、「感じる 14」、「つくる 10」などの抽出回数が多いので、自然と生活をめぐり理解は深まったといえよう。図 2b と対比してみると、自然をめぐって、料理、人、地域に共通する回答が多く、理解の深まりはこのカテゴリにポイントがあるようだ。

質問 B3-c 伝統的な知恵や技術の大切さについては、語彙「知恵 38」、「技術 26」、「生活 20」、「自然 15」、「伝統 14」、「古く 14・昔 11」が多く回答され、これに「大切 19」、「感じる 17」、「学ぶ 13」、

「考える 11」など積極性を示す語彙が伴っていた。知恵や技術の学びが大切であるとの理解については図 2c に示した。「技術」に関わって「生活」、「大切」が共通する回答として多く、感性的には(伝統的) 技術が良いものとして描かれている。

質問 B4-d 気づきや知識を暮らしに活かせるかについては、語彙「生活 20」、「自分 19」、「自然 15」、「意識 13」が多く回答され、また、「活かす 21」、「つくる」、「考える」などの積極的な動詞がともなっていた。さらに、知恵を暮らしに活かせるかについては図 2d に示したが、感性的には、都市生活の負の面と正の面がともにあげられ、生活をよくするために努めようという意志がいくらか認められる。

質問 B5-e 農山村への関心・興味が高まったかについては、語彙「農山村 30」、「自分 20」、「自然 17」、「生活 13」、「住む 11」とともに、「くる 18」、「もっと 18」、「感じる 14」、「できる 10」など積極的な表現が見られた。農山村への興味・関心の高まりについては図 2e に示したが、山村の良さへの認知は、実際に現地に出かけて、住民の話を聞くことにより高まるようだ。

質問 C1-f プログラム全体の印象について、語彙「自然 28」、「話 20」、「村 13」、「人々 12・人 11」、「自分 11」、「茶・山菜・ご飯・10」、「子供 10」、「田んぼ 10」が多く回答にみられ、一方、「おいしい 22」、「とても 16」、「感じる 14」、「くる 12」、「食べる 12」、「できる」、「楽しかった 11」など積極的な表現が多くあった。さらに図 2f によれば、自然をめぐって、人、話、村、料理が良いもの、美味しいもの、と肯定的印象としてとらえられていた。作業および時間に関して賛否分かれているのは、体験する時間配分が不適切か不十分であったことを示している。

質問 C2-g 新たな学びや発見に関しては、頻出した語彙は「自然 23」、「自分 21・私 10」、「山菜 12」、「農山村 12・村 12」、「話 12」、「生活 11」、「人 11・人々 11」、「農業 10」であり、これにともなって「つくる 24」、「感じる 23」、「くる 18」、「できる 18」、「とても 17」、「知る 17」、「考える 14」、「学ぶ」、「たくさん 13」、「気付く 11」、「使う 10」など、主体を明確にし、積極性を示す語彙が多かった。さらに、図 2g によると、人をめぐって自然、山村、生活に共通する回答が多く、感性的には良い評価であった。しかし、山村の課題は良し悪し両面が指摘されてもいた。

質問 C3-h 環境と調和した公正な社会へのヒントについては、頻出した語彙は「自然 43」、「自分 27・私 11」、「生活 23」、「食べる 21」、「環境 21」、「社会 15」、「人々 13・人間 13・人 12」、「意識 13」、「米 11」、「都市部 10」、「活動 10」であり、これらにともない「もっと 27」、「考える 22」、「大切 22」、「感じる 17」、「使う 15」、「持つ 13」、「できる 13」、「作る 13」など、主体的かつ積極性を示す語彙が多かった。図 2h に示したように、自然をめぐって多くのカテゴリが関与しており、主要な課題は明確ではないが、複雑な社会を考えるヒントはあったのだと理解したい。

最後に、質問 C4-i 感想・意見については、頻出する語彙「体験 21」、「参加 21・参加したい 13」、「自然 17」、「今回 16・機会 12」、「キャンプ 11」、「自分 11」であったが、これにともなう感想に関する語彙は「ありがとう 57」、「とても 31」、「楽しかった 24・楽しい 14」、「もっと 16」、「おいしい 16」、「できる 15」、「考える 14」、「つくる 12」、「良い 11」、「学ぶ 11」、「感じる 10」、「貴重 10」などがあり、総体としてとても高い評価が示されていた。図 2i に示したように、自然の中で行った、キャンプが楽しく、これを支えたのが、料理(米)、人、体験であり、参加したことの積極的な評価につながったのだと考えられる。

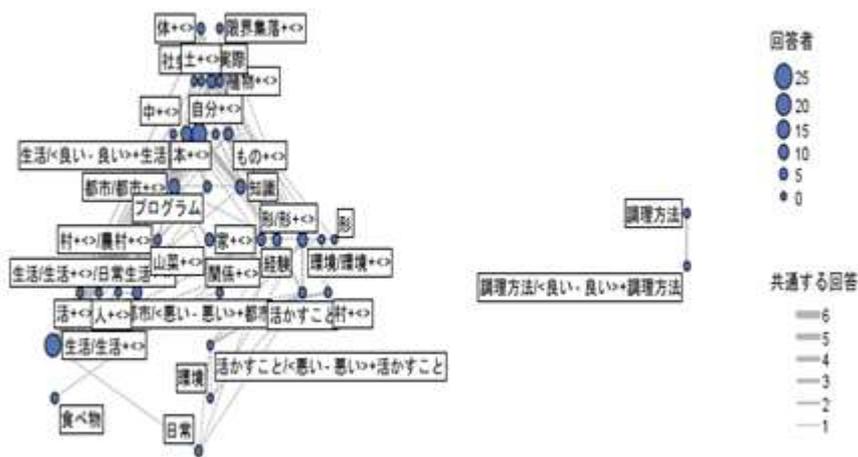


図2d.知識を暮らしに活かせるか(B4r4;感性1-6)

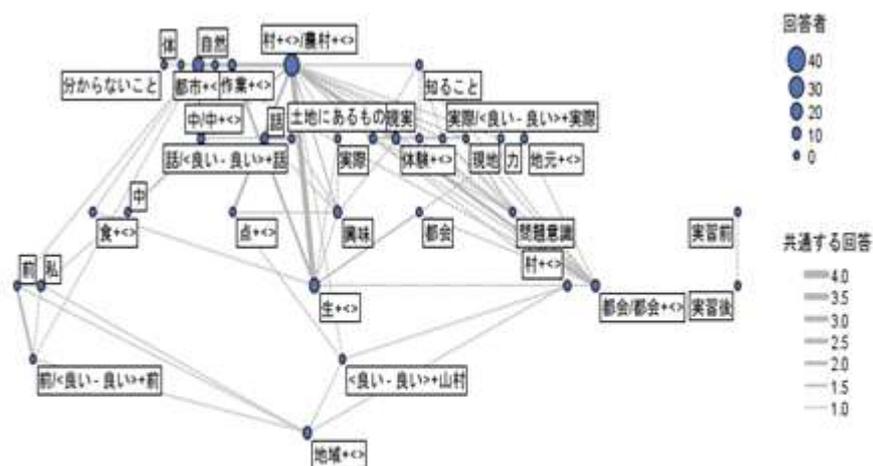


図2e.農山村への興味・関心の高まり(B5r5;1-4感性)

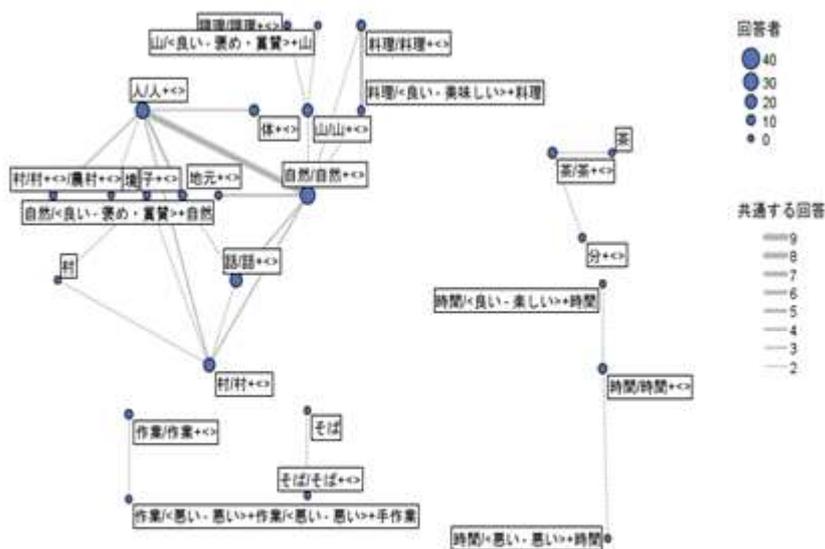


図2f. プログラム全体の印象 (C1r6,2-9感性)

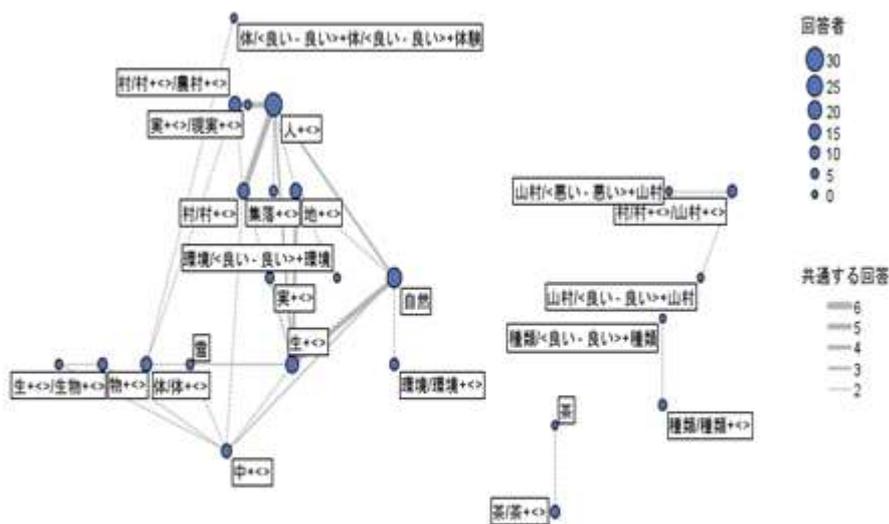


図2g. 新たな学び、発見など (C2r7,2-6感性)

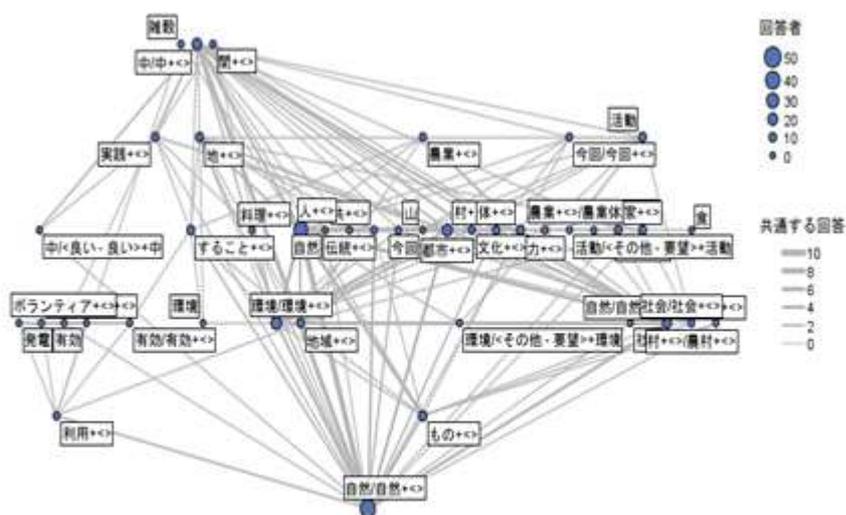


図2h 環境と調和した公正な社会へのヒント(03r8;1-9感性)

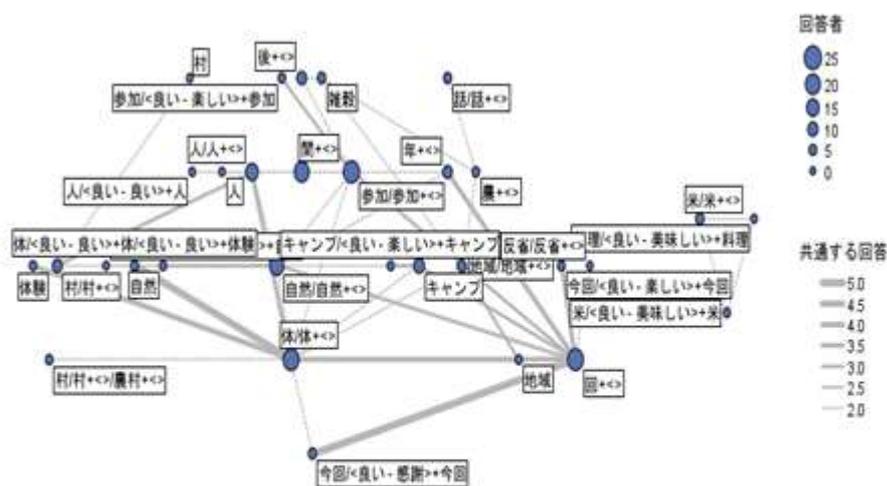


図2i 感想・意見(04r9;2-5感性)

5. おわりに

参加者の属性によらず、記述統計の結果からは、伝統的知識・技能を体験的に学ぶことの評価は高かった。テキスト分析によっても、実施された環境学習プログラムへの満足度は高いといえる。参加者の主要な関心は自然のなかでの体験である。この体験学習の評価を高めている要素は、人々（山村民、主催者、参加者、交流）、場（自然、農山村）、料理（食材）、および生活文化である。農山村や生活文化に関心を高めるようになるのは、農山村で人々が生の生活経験を話し合うことによってである。これによって人々の生活改善への意欲も高まり、全ての参加者が体験の場を共有したことへの感謝の言葉に繋がっている。

農山村での体験的環境学習プログラムを実施することは準備も大変で、参加者も多くなく、地味な活動ではあるが、確かな効果を着実に上げてはいる。この堅実なモデルを普及して、都市住民がさらに参加するように、各地で類似の活動が広まるよう期待したい。自然災害や社会変動に対する復元力（レジリエンス resilience）は、短期的には伝統的な知識や技能が特に有効であり、このために長期的に見てもこれらを継承保全していくことが社会の安定や家族と地域社会の平安・幸福につながる。このような思考経路を体験的に認識できるような環境学習が望まれ、今後とも研究すべき課題であろう。

6. 引用文献

ホルムグレン, D. 2002、タナカ, R. ほか訳 2012、パーマカルチャー（上・下）～農的暮らしを実現するための 12 の原理、コモンズ、東京。{“Permaculture: Principles and Pathways Beyond Sustainability.” Hepburn, Victoria: Holmgren Design Services.}

木俣美樹男 2015、都市と田舎～生活文化の再創造による継承、『生き物の文明への黙示録』
<http://www.milletimplic.net/>

参考資料

公式ホームページ「植物と人々の博物館」<http://www.ppmusee.org/>ではエコミュージアム日本村（トランジション小菅）、および個人ホームページ「生き物の文明への黙示録」<http://www.milletimplic.net/>では、日本村塾、雑穀データベース、森とむらの図書室、民族植物学、環境学習、民具・その他資料のアーカイヴが、e-ラーニングできる。

(2014-7-14 木俣メモ、2016-6-23～7.12 加筆)